

資料 1 保育実践力の育成

保育実践力は、広義では、保育者が保育を実践する上で必要な知識、技能、態度と捉えられよう。ここでは実習指導のガイドラインであることをふまえ、学生が部分実習や全日実習等において乳幼児への援助活動を行うために、最低限身に付けておくべき必要な力を中心に取り上げる。

多くの養成校では、保育実践力は、保育実習に関わらず卒業まで継続的に育成されている。主に実技科目や演習科目で扱われ、乳幼児への生活支援や遊びの指導等、具体的な題材を通じて培われる。また、保育実践力の育成には、学生自身の家庭環境や経験（ボランティア、アルバイト等）によりレディネスの差も大きい。

保育実習では、実習園、実習時期、実習日数、担当クラス（年齢）が、おおよそ事前に想定できることから、早い時期から取り組めば各々の対象に合わせた具体的な準備が可能である。ここでは、あらかじめ実習で対象となる乳幼児を想定し、部分実習や全日実習等で行う保育活動の準備教育について示すこととする。

これらの指導を通して、自己の保育者としての実践力や課題に気づき、意識しながら保育実習に取り組むことにより、事後学習への意欲が喚起される。さらに一人一人の学生にとって必要な課題の焦点化が可能になる。

1. 乳児への支援

「乳児保育」や「子どもの保健」、「子どもの食と栄養」、「子どもの健康と安全」等で学修した内容が、具体的な支援場面で活かされるように、実習の事前指導においても確認・再指導する。

項目①～④の支援内容は、乳児の保育に当たることを考えると、事前に確認しておきたい内容である。特に、乳児院での実習生に関しては、学びを再度確認する必要があるだろう。

- ① 沐浴
- ② 調乳
- ③ オムツ替え
- ④ 着替え 等
- ⑤ 午睡 等

ここでは、赤ちゃん人形を人数分用意して、大勢の中で指導するのは容易ではないため、実習室等の沐浴指導できる場所を確保して、学生をグループにして学び合いの学習形式でスキルの取得に取り組めるようにする。

2. 遊び

いわゆる“遊び”を大きな枠組みで捉え、ここでは（1）感覚遊び（2）造形遊び（3）手遊び・歌遊び（4）運動遊び（5）体操遊び（6）ルールのある遊びの6つに分類した。遊びは園生活の中心であり、子どもの生活そのものである。学生はこれらの内容をそもそも自分自身の経験として持っている。また、養成校での取扱いも多様であるため、子どもと一緒に遊ぶ際のスキルは個人差が大きい。

事前指導の限られた時間内では、それぞれの遊びの楽しさやその理由、発達に応じた展開の仕方など

をすべて盛り込むことは難しい。また、遊びの楽しさは“実際に遊びを体験する”ことでしか伝わらない。そこで、理論から実践までを系統立てて教授する指導も必要である。

しかしながら、(1)～(6)のような保育者が提供する遊びを、多様に実践できることが保育実習をより充実させることに繋がる。そこで、実習指導の1単位時間のどこかに、少しずつでも取り入れるなどしながら、学生の遊びのレパートリーを増やせるように計画的に指導を展開することが求められる。

実際の指導場面では、授業のアイスブレイクとしてこれらの遊びを取り入れることで、雰囲気作りを兼ねた学生の遊び体験に繋がる。学生同士が互いに遊びを紹介し交流することでレパートリーを増やすことができる。また、子どもの集団での活動に応用できるレクリエーション・ゲームなども行うとよい。

(1) 感覚遊び

低年齢児の感覚遊びは、保育士と共に行われることが多い。水や砂、泥などに触れる砂場での遊び、小麦粉の粉から作る小麦粉粘土、スライムなどはできれば体験し、その遊びの前後の準備や片付けを一連の流れとして学ぶ時間の設定が望まれる。また、大きな布を利用して隠れる、引っ張る、引っ張ってもらう、保育士に布の上で揺らしてもらうような全身で味わう感覚遊びなどは、実際の保育場面では見られるものの、養成校で学生自身が体験することは容易ではない。そこで、実際の遊びの様子を図書や写真などで紹介しながら知らせていくことが必要になる。

また、体の動きが滑らかになるにつれて、滑り台で遊んだり、一人でブランコを漕いで揺れや風を楽しんだりすることができるようになる。また、プレイバルーンのようなカラフルな大きい布を使って集団で感覚を味わうような遊びも楽しめる。いずれも、表現する方法は言語や動き、表情だけではないこと、さらに子どもの心が解放されることへとつながること、を意識させながら伝えていくことが必要である。また、障がいのある子どもに対する感覚統合遊びや、保育現場で繰り返し広げられている多彩な事例は、可能な限り、視覚的教材を活用して紹介したいものである。

(2) 造形遊び

造形遊びは、保育所の実習でも、責任実習に造形的な遊びを取り入れるよう求められることがある。そのため、遊び出しへの流れがスムーズに行われるようなストーリー作りや、ものの提示の仕方、言葉かけ等、具体的な子どもの動きを想像し、それらに応じたシミュレーションができるようにさせたい。一斉での造形活動では、製作物の仕上がりは個人差が大きいものである。子どもの発達に合わない素材や内容であれば、自分から取り組もうとすること自体が難しくなるし、途中で投げ出してしまうことも予想される。そのため、子どもの実態の把握が重要となってくる。どんな素材を好むのか、ハサミやのりなどはどのように使用しているのか、使用できるのか等、幼児の姿を観察し、取り組めるようにしておくことが肝要であろう。また、単なる作業で終わるのではなく、子どもが自由に表現したり遊んだりできる要素を、必ず活動に盛り込むようにしたい。一斉での造形遊びでは、製作物(作品)の完成までの時間も異なる。そのため、早くできあがった子どもの思いが損なわれることのないようにしながら、未だ完成途中の子どもに対する援助をどのようにするのか、具体的に実習生自身の動きをあらかじめイメージしておくことが必要である。早く完成させる子どもはその製作物を使って遊んだり、飾ったりしたい思いが強いので、その思いを受け止めながら、時間をかけて作っている子どもとの間で、しっかりとした全体への援助が求められる。事前指導の段階では、学生がまだ関わっていない幼児の姿を想定して計画を立てることは難しいので、学生自身が予定する造形遊びの教材研究として、試作や見本を作ることを勧めたい。作業経験をすることによって、子どもにとって難しいポイントや時間配分、子どもだ

とどんな造形遊びになるだろうかといった想定がしやすくなる。もちろん、試作がそのまま一斉での造形遊びに活用されるわけではないので、実習の際には子どもの姿や実習園の指導に合わせて変更することも確認が必要である。

好きな遊びの時間に展開される造形遊びは、クラスでの一斉活動とは大きく異なる。好きな遊びの造形遊びは、一斉での造形遊び以上に、子ども一人一人が異なる思いを持って遊んでいる。そのため、実習生には子どもの思いを理解し、遊びがさらに面白くなるような展開を想像しながら、さりげないものの再配置や分量の補充が求められる。これらは、子どもの視座に立ち、何を楽しんで造形しているのかを理解しようとする観察から始まる。まさに幼児理解があつての遊びの指導となるわけである。それができなければ、子どもの遊びへの介入の仕方次第では、子どもの主体的な遊びの流れをさえぎってしまうことにもなりかねない。このことも事前指導では十分に理解させておく必要がある。また、事後指導では、その園での造形遊びを紹介し合い、学生の体験を語り合う場を設けることも有益な活動となろう。

(3) 手遊び、歌遊び

手遊び、歌遊びはもっとも身近であり、また一日の流れのなかで様々な場面で使われている遊びである。人数や対象の制限が少なく、道具の有無などの条件を選ばずに楽しむことが特徴としてあげることができよう。

保育の中では活動の区切りや導入、季節や行事に関する内容に用いる、手のひらと指を素材としてイメージをふくらませる楽しさとリズムカルな曲に合わせてうたうという音楽的感覚の楽しさを味わう、手遊び、歌遊びそのものを遊びとして位置付けることも可能であることなども伝えておきたい。

このように身近で、手軽でありながら手遊び、歌遊びは子どもの成長のために大切な要素をあわせ持つ、優れた遊びであると認識し、その楽しさを子どもの笑顔とともに実習生も実感してほしい。特に手遊びのレパートリーは多く持ち、実習生に任せられた際に自信をもって取り組めるよう準備しておくことが大切である。

実践に際しては子どもが新しい手遊びや歌遊びに興味を示し、やってみたいと思えるように導入の仕方を工夫する。手遊び、歌遊びは教える事、覚えさせることではなく、子どもの前で実習生が楽しく、恥ずかしがらずに手指の動き、歌などを子どもに分かるように大きく表現することが大切であること、手遊び、歌遊びを一緒に楽しむことを忘れずに子どもの様子を観ながら行うことを留意することの大切さも伝えておきたい。

(4) 運動遊び

幼児に運動遊びの楽しさを味わわせ、自ら喜んで友達と活発に活動する基礎を培うためには、運動遊びや戸外での遊びに対する価値を知り、健康意識を高めていかなければならない。そのためにも養成校では、運動遊びの持つねらいや意義を学生に確実に浸透させ、子どもの目線で運動遊びを楽しみ、学生同士のふれ合いや動きの経験から心も体も弾んで、運動することの楽しさや、心地よさを存分に味わわせていきたいものである。

運動遊びは、基本的な歩く、走る、跳ぶ、転がる、投げるなど全身をつかって行う動的活動のことであり、子どもが夢中になって生き生きと体を動かす遊びの中で、多様な動きの獲得につながっていく。また遊びを繰り返すことにより、動きのなめらかさとともに洗練化も図られていく。ただし、どの遊びにもいえることであるが、「子どもが喜ぶので行う」というのではなく、各年齢の発育発達の特徴・

特性について理解を深め、子どもの実態をよみとった運動遊びの提供が必要である。つまり、年齢にあった運動量と質の確保を意識しながらの組み立ては、運動能力の向上や意欲喚起に役立ち、子どもにとっても十分な動きの満足感を得ることにつながるのである。学生は子どもの実態を把握しきれていない場合が多いが、実習中は、各実習園の指導内容に応じて担当教員と相談しながら運動遊びを進めていくのが望ましい。

運動あそびは、一人で操作できる小型遊具を使った遊びや、マットや巧技台等の大型遊具を活用した遊び、新聞紙や空になったペットボトルを活用した手作り教材での遊び、ゲーム的な遊びなど多種多様にある。それらの遊びを行う場合、一つの教材の活用に固定するのではなく、そこから応用ができるよう事前に遊具の扱いや使用方法などを確認することが大切である。実習前の演習科目では、子どもの様子を想定しながら、安全面の配慮、環境に目を向けさせるよう授業を展開・内容を構成することが必要である。

運動遊びの実践として、新聞紙を使った遊びを例に挙げる。新聞紙は、活用の用途が幅広く提供できる教材の一つである。新聞紙を丸めて、的当てのボールにしたり、的入れとして展開もできる。サッカーボールの代用としてゲームにも活用できる。新聞紙を開いた状態で走ったり、新聞紙を棒状に丸めて、やり投げのようにして遊ぶ方法等もある。一つの教材の活用に固定するのではなく、そこから応用ができるよう紹介したい。同時に、子どもが「次もまたやってみたい!」「こんどは、どんな遊びをするのかなあ」などワクワク、ドキドキする期待感や楽しみを感じ、意欲を沸かせるような言葉かけや雰囲気づくりができるような援助の仕方を考えることが大切である。したがって事前授業の中では、まず学生自身が活動を体験することで気づき、話し合いの場を設けることにより、工夫や改善すべき要素が見出せ、オリジナルの実践活動として展開が可能になる。

(5) 体操あそび

最近では、「体操」という言葉の使われ方が多様化している。表現あそび、模倣あそび、リズムあそび等の中にも体操的な要素が加わり、本来の体操あそびの意味合いが曖昧な形になってきた。

体操あそびは、幼児であっても基本となる心臓から遠い上下肢の運動から始め、首・胸の順に胴体を徐々に大きく動かす動きへと移行させる。その後ゆっくりと呼吸を整えながら上下肢の運動に戻り整理の段階へ入る。体を満遍なく動かすことは、幼児の体力低下を予防し、調整力の保持にも役立つ。動きを構成する際には、同じ動きの繰り返しや号令によって反復練習をするといった画一的な動きではなく、子どもが動きやすいようにリズムに変化を持たせるなどして心地よい汗をかく爽快感を味わわせたい。また保育者が子どもの前で手本となっていく体操は、各部位を意識し、伸びやかにそしてめりはりのある大きな動きが望ましく、保育者が笑顔で楽しそうに動くことによって子どもは自然に模倣することが楽しくなり、体操の目的である体の各部位のしなやかさや体づくりが図られていくものと考えられる。

体操あそびの実践として、戸倉ハル氏の考案された数多くの作品の中から「くまちゃん体操」について触れることにする^{*}。くまちゃん体操は、小鳥（上肢下肢の運動）、馬（下肢の運動）、とら（首の運動）、ペンギン（胸の運動）、くま（背腹の運動）、さる（側屈の運動）、うさぎ（跳躍の運動）、にわとり（整理運動）、くじゃく（呼吸運動）の9種類の動物を中心とした動きで構成されているが、各動物の動きの特徴がうまく体操と表現に反映されており、ダイナミック且つ躍動的な動きが多い。子どもにとってなじみの動物が多いため、親しみやすく楽しい体操として定評がある。小学校領域における模倣の運動遊び、体づくり運動や表現運動の動機づけにもなり、活用度の高い体操である。養成校での指導では、学生自身の動きの鍛錬が、子どもの前で自信を持った良い動きにつながり、子どもに感動や刺激

を与えることにつながることをふまえ、各体操・動物の模倣等が体のどの部位を意識しつくりられているのか理解するためにも、学生が互いの動きを鑑賞し、適格に動いているかを確認し、より確実な動きが身につくような指導が必要である。

※引用文献 松本民子「幼児のリズム体操集」チャイルド本社, 1981, pp.81-87.

(6) ルールのある遊び

運動遊びの中には、ルールや約束事・きまりが含まれているものが数多くあり、守ることによって楽しい遊びが成立する。しかし、ルールやきまりは保育者の経験や考え方を一方的に押しついたり、指示したりするものではなく、基本的には子どもがアイデアを出し合い、工夫し、自分達でつくりあげていくことが望ましい。つまり保育者は、子どもの自由な発想のもと、面白さを広げていける雰囲気づくりや遊びの発展・変化を楽しませるような場面、場面に応じた指導力が必要なのである。

ルールのある遊びでは、複数の子どもが活発に動き回って遊ぶ中で、個々に自分なりの欲求や興味・関心を持ち、楽しみや喜びを求めて活動している。そのため、時には自己主張などの口喧嘩のような場面が想定される。保育者は、その場の状況のみで判断し注意するのではなく、その喧嘩や喧嘩の要因となった事柄を両者から聞きながら、ルールとは何のためにあるのか考えさせ、子どもでルールを守って遊ぶことで、結果的に、より安全にそして楽しく遊べることを理解させることが必要である。また、自分の主張だけではなく相手を思い理解する気持ちや尊重することの大切さ、人との関わり合いを通して、協調性や社会性を育むことができるのである。4歳児頃から、様々な運動遊びを通して基本的な動きが習得でき、やさしい運動から複雑な運動に挑戦しようとする意欲が芽生えはじめる。それと同時に、他の子どもにも興味・関心を持ちはじめ、ごっこ遊びや簡単なルールのある遊びなど、友達と一緒に運動することに楽しさを見出せるようになってくる。5~6歳児頃からは、目的に向かって友達や集団で力を合わせ協力し、自分たちで約束ごとやルールを決めて遊べるようになる。また、競争意識も高まり始めることから遊びのルールを子どもと一緒に確認することも大切である。

ここでは「鬼ごっこ」を例にとり、遊びの特徴と指導にあたっての留意点を考えてみる。鬼ごっこには、様々な遊び方があり、走力や運動機能の発達促進に有効な遊びの一つである。基本的には、追う、逃げる、捕まえる、の繰り返しの遊びになる。鬼に捕まりそうになったら素早く身をかわしたり、鬼が子どもを捕まえたりしたときなどの達成感や鬼ごっこの醍醐味でもある。また、単純な鬼ごっこから、ルールや役割、ジャンケンを含んだ複雑な鬼ごっこにするなど、ゲームにまで応用ができる遊びである。しかし、いつも同じ子どもが鬼役であったり、いつも直ぐに捕まってしまったりというような状況が繰り返される場合には、鬼ごっこが嫌い、つまらないと感じ(4)で述べたような運動遊びの効果を得ることは難しい。本来鬼ごっこは、全身をつかう運動であるため、行う時季や回数・時間を十分に考慮して行うことや人数に合った場所等環境設定にも留意しなければならない。いつでもどこでも気軽に遊べる鬼ごっこだが、子どもが夢中になって遊べる要素をふんだんに含んでいるため、実習生には常に子どもの表情や会話に耳を傾け、子どもの好奇心と運動の促進を考えた指導内容に注目し、事前の準備と予測したルールの確認をすることが必要である。

3. 児童文化財の活用（作成）と実演方法

児童文化財の指導は、保育内容に関する演習や基礎技能等で実施されることが多く、養成校によって

は特色のある教科目を特設して指導に当たっている。そのため、実習の事前指導では、学生がそれまで習得した内容に合わせて、児童文化財の活用や事前の準備としての作成活動、実演のための練習などが挙げられる。

特に、好きな遊びの時間の終了後や昼食前、午睡前の時間には、学生の部分実習として一斉指導を行うことが多い。そのような短い時間での一斉指導では、子どもの育ちに合った児童文化財を選択し、適切に提供（指導／援助）することが求められる。また、全日実習では、前述の時間も含めたデイリープログラムを立案し、様々な児童文化財のなかから、子どもの心身の発達を育むための素材をあらかじめ選択しておく必要がある。

そこで、実習の事前指導としての児童文化財の取り扱いは、例えば、絵本、紙芝居、素話、童話、各種シアター（ペープサート、エプロンシアター他）等の活動の特長を再確認することが望ましい。季節や行事、その時期の園の活動にあった内容を、子どもの発達に照らして、複数の児童文化財から準備し、それらの提供が丁寧かつスムーズに行われるよう、教員がポイントを解説し、実演を通して指導する。

以下、具体的な事前指導の方法（例）を示す。ここでは、教員は学生同士が互いに学び合う意欲付けや雰囲気づくりを大切にされた指導を展開する。そして、学生が自ら積極的に実習の準備・練習に取り組めるようにする。

（１）絵本

絵本は絵と言葉が融合してストーリーやテーマを物語り、一つの世界がつくられている本をさす。ページをめくると新たな世界が広がり、絵だけを見てもストーリーが分かることが絵本の特徴である。読み聞かせをすると、子どもらしい物事の受けとめ方や感じ方を分けてもらうことに気づく。子どもと共に心が通い合えるその時間を一番に大事にしたいものである。

絵本の読み聞かせの仕方には諸説あるため、指導者の指導法に委ねることとして、ここではクラスの集会活動としての読み聞かせで、必要と思われる事項について列挙する。「読む」ことについての具体的なスキルとして絵本の安定した持ち方やめくり方などの練習、そして誦んじられるように何度も読み込んでおくことが必要となる。また、読み手の声の大・小、穏・急、間を工夫し、顔の表情なども子どもが絵本の世界に入り込めるようにするために必要な技術である。これらの技術も子どもや保育士の前で整然と読み聞かせられるように練習しておく必要があるだろう。もともと絵本は個人が手にとってみて自分のペースでじっくり眺めたり、身近な人に読んでもらったりするためのものである。そのため、集団の場合は絵と文章のバランスの良い本や少し離れた場所からでも絵がよくわかる本を選ぶ必要がある。

実際の指導では、絵本の役割、実習時期や配当学年に合わせた絵本選定のアドバイス、読み聞かせのポイント指導を行う。絵本は、単なる時間調整のための教材ではないため、絵本を取り入れる際の考え方を理解できるようにする。また、指導者が読み聞かせのポイントを挙げ、読み聞かせをしながら評価する学び合いの手法が効果的である。

最後に、物語の筋を暗記したり、読み聞かせの技術を習得することはのぞましいことではあるが、絵本の作品についてその質を見極める目を学生時代に養うことも大切なことである。

（２）紙芝居

紙芝居は、文字どおり「紙の上の芝居」である。そのため、紙芝居には、台詞の他に、読み手の声の出し方や速度、紙の抜き方などが丁寧に示されている。読み手は、「演者」となって、声色を変えたり、

絵の抜き方を工夫したりしながら、紙芝居の場面を演出することが大切である。

最近の紙芝居は種類も豊富で、これまでのような誰もが知っている昔話の物語や絵の付いた創作童話だけではなく、基本的な生活習慣の習得のために写真で構成した紙芝居や動物の写真を用いたクイズ形式の紙芝居などもあり、多彩に活動を展開することができる。

実際の指導では、まず紙芝居が芝居であることを理解させることが必要であろう。指導者が演じ手になりきって紙芝居を演じてみせたり、学生同士が互いに演じ合い、評価し合うような学び合いが効果的である。また、自己紹介を自作の紙芝居で作成したり、歌の歌詞を紙芝居にして、一緒に歌ったりすることも、事前の学習では大切になってこよう。

(3) 素話

素話は語り手と聞き手がいれば、他に何も道具がいらない素朴な文化財である。語り手のことばから子どもが想像力を働かせ、一人一人が自分自身でイメージを創り出すところが素話の特徴である。絵本や紙芝居の手軽さに比べて、物語を憶えなければならない。しかし、既成の物語にこだわらず、園生活の出来事や身近なものを題材にした創作話も子どもは興味を持って喜んで聴く。そこには子どもが主体的に聴こうとするための保育士の力量がなければ、素話は成立しない。

そのため、実際の指導では、どのように進めれば、素話が成立するのかを具体的に考えさせる必要がある。話を選定する際に再話など多数の物と読み比べてみる大切であり、内容や文体、表現などそれぞれの違いを発見し、自分が語りやすいものを選ぶとよい。また、子どもの育ちにあった内容であり、身振り、手振りは自然に出てくる範囲とし、過剰な演技表現は必要がない。子どもが理解できる言葉をできるだけ用い、その話に子どもが自分から入り込めるような話術とは、どのようなものなのか、指導者自身が見本となって示すことが必要であろう。実習内容によっては実践の機会がなく、事前指導と関連付けにくい場合があるかもしれないが、保育士の話を聴くことの大切さや、素話の素晴らしさは指導しておきたい。

(4) 童話

このガイドラインでは、絵本ではなく、挿絵の少ない物語の図書を「童話」として捉えている。

童話の読み聞かせは、3歳以上児、特に年齢が上がるにつれて取り入れられることが多い。童話の読み聞かせも、読み手の力量に大きく左右される。特に、年長児であれば、たとえ文字だけが並んでいるページでも、絵本を読むように左手でページを示しながら読み進めることで、その物語の世界が文字だけで表されていることを知り、文字に関心が持てるようになってくる。

実際の指導では、保育現場での童話の役割について再確認させたい。童話は、実習指導以外の教科目（特に、保育内容（言葉））でも扱われることがあるため、実習指導では、多くの園で読まれている童話を指導者が紹介できるようにしたい。

また、実習後の活動として、学生が実習先の保育室や蔵書を見せていただき、学生同士で共有することで、数多くの園で活用される童話に触れることができる。これらは、事前に課題として取り上げ、事後指導として取り入れることもできよう。

(5) 各種シアター（ペープサート、エプロンシアター他）

近頃は、書店でも市販の教材を扱うようになって来た。また、作成用キットは、保育教材販売店やインターネットから手軽に購入できるようになってきた。そこで、実習の事前指導で使用できるように、

養成校にはパネルシアターやエプロンシアターも数種類は用意しておきたいものである。

実際の指導では、分かりやすい物語などをペープサート、エプロンシアターで作成し、学生同士で演じ合うなどの経験や練習、自分なりの演じ方を工夫できる場や時間を経て、実習施設で活用できるようにしておきたい。手作りの教材だからこそ子どもに伝わる温かみや感覚を学生自身が体感する中で子どもに表現するひとつの手段として取り入れてほしい。また、学生自身が楽しく感じ演じることで子どもに伝わることを実感できることが重要と考える。

4. 環境の構成に関する指導

幼少期に直接体験の少ない環境で育った学生でも、保育の専門職として実習に出る際には、項目(1)～(4)は少なくとも理解して欲しい内容である。また、事前訪問時などでは、園庭の樹木や草花、散歩で出会う自然について確認し、自ら調べ、知識として子どもに伝えられるような準備も必要であることを十分理解し、適切な環境の構成について考える力量を備えさせたいものである。

環境の構成に関する事前指導では、保育室のあつらえ、園庭の植生などについて、具体的かつ適切な保育所の事例を紹介し、保育者の意図が理解できるような指導を行うこととする。

また、環境の構成については、事前指導だけではなく、事後指導においても十分な時間が必要であろう。事後指導で実習園の環境から保育者の意図を想起することは、繁忙な実習中よりも、事後指導で確認することが有効である。そこで、事後指導の時間を確保して、学生が経験してきた保育所の様子を図示したり、「園庭道具の出しやすさ、片づけやすさ」「個人ロッカーの使い方」「椅子を使った保育室での集まり方」「遊戯室での全園児の集合の仕方」など、保育実習で確認することが可能な項目をあらかじめ決めておき、実習後に文章にして表す活動は重要であろう。

(1) 四季折々の活動

四季折々の遊びは、季節の植物、虫などに関した知識を取り入れながら子どもに関わる。また、季節の伝統的な行事を知り、学生が行事の意味を理解したり、伝統行事について子どもに分かりやすく説明したり、行事にあった活動を選べるように事前学習を促す。

(2) 園のまわりの植生の観察、樹木草花の名称の理解

学生自身が四季折々の植物や虫に関心を持ち、調べておくとよい。実習で、植物や虫を知っていると、子どもとの散歩の際に会話の糸口になったり、子どもと一緒に関心をもって植物等を調べたりすることにつながる。実習前に、学生が植物について関心を持つことが必要である。他の授業(例えば、環境など)と関連させながら学生自身の学習を促すのも教育の方法であろう。また、実習に行った際には、子どもの植物や虫についての気づきに「あ、本当だね!」「そうだね!」と返事をしたり、「一緒に調べようね」と誘ったり、学生が調べてから子どもに知識を伝えたりすることが、子どもの興味・関心を広げるとともに、学生自身の子どもの理解につながる。

(3) 材料、道具の使い方、指導法

子どもがどんな材料、道具を使って活動しているかは、実習施設によって異なる。特に一斉保育で道具を使う場合は、事前に実態を確認する必要がある。例えば、はさみのように危険の伴う活動の場合は、実習生が保育実習の中で使用することを禁止している場合もある。また、実習園によって道具を使う際

のルールが異なる場合がある。各園で行われている保育のつながりを切らないようにするためにも、普段、保育士がどのように言葉がけをして子どもに道具を使わせているか、事前に把握しておくこともスムーズである。担当する子どもが、どの程度その道具を使えるかを把握しておくことも当然必要である。一斉保育で使用する材料については、できるだけ実習生自身が揃えるようにしたい。画用紙など実習施設の材料を使わせていただくこともあるが、使いたいだけ使うというわけにはいかない。かといって実習生が自費で何千円も支払うようなことも避けたい。身近な素材で代用するなど、柔軟に工夫することも大切である。

<はさみについて> はさみを一斉保育で使う際は、事前に担当クラス担任や実習担当保育士に確認をとるようにし、切る素材や形が難しすぎたり簡単すぎたりしないよう、子どもの実状に合った指導計画案を立てたい。活動に入る際は、はさみの正しい使い方を子どもと確認しながら見本を示すようにすると、子どもが活動をイメージしやすくなる。活動中は、安全に、楽しくはさみの活動ができるよう、全体に目を配りながら進めることとなる。関係のない時にはさみで遊ばないように、準備や片付けのタイミングも考えておきたい。

<のりについて> のりといっても、手で塗るタイプのでんぷんのり、水のり、スティックのり等、様々な種類がある。どんなのりを使っているかは実習園によって違い、また、子どもの年齢で使い分けられていることもある。ここでは、学生が普段あまり使わないでんぷんのりについて触れたい。指ですくうのりの量の確認をする際は、「豆粒くらいの量」などのように子どもがイメージしやすい言葉を使うと良い。また、のりのついた手で周りのものを触って汚さないように、手拭などの配慮もしておきたい。

(4) 実習期間の行事に関する事前事後の活動 等

運動会であれば体を動かすことや主になる活動の楽しさや、生活発表会では表現する楽しさや作っていく楽しさを子どもが知ること、行事の後に子どもから「やった～」という声を聞けるような指導を学ぶことが大切である。このような基本的な考え方を学生が知り、実習先での学びにつながると良い。